

凧

魯迅

(訳 仁平重光)

故郷での凧揚げの季節は春の二月で、サーサーというウナリの音が聞こえてきて顔を上げたら、薄墨色のカニのかたちをした凧や薄い青色のムカデ形の凧が見えるだろう。それに、ひとりぼっちでウナリを付けず低く浮かんでいる瓦凧もある。しおれていかにも寂しそうである。

しかし、このとき地上では楊柳がすでに芽吹き、早咲きのヤマモモも多くの蕾をつけ、子供たちが描く天上の飾りといっしょになって、暖かな春の日を作り出している。

私はいまどこにいるのだろうか。四方はまだ厳冬の中にあるのだが、しかしはるか昔に別れた故郷の過ぎ去った春の日は、もうこの空にただよっている。

私はもともと凧揚げが好きではなかったし、好きでないというよりは、大嫌いだった。凧揚げは、将来の見込みのない子供がやるものだと思っていたからだ。私とは反対なのが弟で、彼はそのころ十歳ぐらいだったろうか、よく病気をして痩せていたが、凧が大好きだった。自分では凧を買うことができなかったし、私が凧揚げするのを許さなかったので、彼はただぼかんと口を開けて、空を見ていることしかできなかった。時には半日も空を見続けていたこともあった。

遠くにあったカニ形の凧がとつぜん落ちると、驚いて大声を出した。からまった二つの瓦凧の糸が解けて離れると、喜んで飛び跳ねた。彼のこのようなことが、私から見ればお笑い種で卑しいことだった。

ある日のこと、ずいぶん長い時間弟を見かけていないなど、私はとつぜん思った。ただ、いつか庭で彼が竹を拾っていたのを見た記憶があった。私にはたと気

づいた。すぐに、人がめったに行かない物置小屋に走っていき戸を開けると、案の定、埃だらけのさまざまな物の中に、彼の姿を発見した。

彼は大きな腰かけのほうを向き、小さな腰掛けに坐っていた。私を見ると驚いて立ち上がり、顔色を失い縮こまった。大きな腰掛けのかたわらには、蝶々型の竹の骨組みが立てかけられていて、まだ紙は貼られていなかった。腰掛けの上には一対の目となる小さなウナリがあり、赤い紙きれが飾り付けられ、ほとんど完成寸前であった。

私は秘密をあばいたぞ、というような満足感を感じながら、同時に、私から隠れて、このような、「将来の見込みのない子供のおもちゃ」を、せっせと作っていたことに、ひどく腹を立てた。私はすぐさま、「蝶々」の片方の羽根を折り、ウナリを地面にたたきつけ、足で踏んでぺしゃんこにした。年齢からいっても力からいっても、彼が私に適うわけではない。絶望にうちひしがれて立ち尽くす彼を、小屋に残したまま、私はふんぞりかえって出ていった。そのあと彼がどのようなであったかは知らないし、気にもしなかった。

しかしながら、私が罰せられる時がついにやってきた。私たちは離れて久しく、私はすでに中年の域に達していた。不運なことに、ぐうぜん、児童について論じた一冊の外国の本を目にしてはじめて、遊戯は子供の正当な行為であり、玩具は子供にとっての天使である、ということを知ったのである。

二十年間というもの、まったく思い出もしなかった幼年時代の「精神的虐殺」の一幕が、忽然と目の前で展開された。私の心は鉛の重い塊となり、下へ下へと下がり落ちていった。だが、心は切れて無くなることはなく、重くなってただただ下に落ちていくだけであった。

私は罪を贖う方法を知っている。彼に凧を送り、凧揚げをするのに賛成し、凧揚げをするように勧め、私も一緒に凧を揚げる。私達は大声を上げ、走り、笑う——しかしながら、彼も私と同様、もうひげをたくわえているのだ。

もう一つの贖罪の方法も知っている。彼に許しを求めにいき、彼が「私は少しもあなたを責めないですよ」と言うのを待つのだ。そうすれば私の心は必ず軽く

なるだろう。これは確かに実行可能な方法である。

ある日、私たちが会ったとき、そのとき私たちの顔には多くの「生」の苦しみを示すしわが刻まれていたのであるが、私の心は非常に重かった。私たちはしだいに昔のことを語りはじめたので、私は話の流れにまぎれこませてあの時のことを話し、少年時代はばかだった、と言った。「ぼくはちっとも兄さんのことを責めていませんよ」と彼が言えば、私はすぐに彼の許しを得ることができて、心はそのときから軽くなるだろう、と考えた。

「そんなこと、あったかな？」と彼は驚いて笑いながら、まるで別人の話を聞いているようにして言った。彼は何も覚えていなかった。すべてを忘れていた。何も恨んでいないのだから許すこともない。恨んでいないのに恨むと言ったら嘘になる。私はこれ以上何を望むことができるか。私の心はいつまでも重く沈んでいくしかないのだ。

いま、故郷の春がこの異国の空にあり、私に過ぎ去った子供のころの思い出をよみがえらせてくれたが、同時につかみどころのない悲

みをももたらした。厳冬の中に潜んでいたほうがましだったかもしれない——しかし、あたりは紛れもなく厳冬で、まさに私に非常な寒さと冷気を与えてくれているのだが。

一九二五年一月二十四日



(中国語原文)

风筝

鲁迅

北京的冬季，地上还有积雪，灰黑色的秃树枝丫叉于晴朗的天空中，而远处有一二风筝浮动，在我是一种惊异和悲哀。

故乡的风筝时节，是春二月，倘听到沙沙的风轮声，仰头便能看见一个淡黑色的蟹风筝或嫩蓝色的蜈蚣风筝。还有寂寞的瓦片风筝，没有风轮，又放得很低，伶仃地显出憔悴可怜模样。

但此时地上的杨柳已经发芽，早的山桃也多吐蕾，和孩子们的天上的点缀照应，打成一片春日的温和。

我现在在那里呢？四面都还是严冬的肃杀，而久经诀别的故乡的久经逝去的春天，却就在这天空中荡漾了。

但我是向来不爱放风筝的，不但不爱，并且嫌恶他，因为我以为这是没出息孩子所做的玩艺。和我相反的是我的小兄弟，他那时大概十岁内外罢，多病，瘦得不堪，然而最喜欢风筝，自己买不起，我又不许放，他只得张着小嘴，呆看着空中出神，有时至于小半日。

远处的蟹风筝突然落下来了，他惊呼；两个瓦片风筝的缠绕解开了，他高兴得跳跃。他的这些，在我看来都是笑柄，可鄙的。

有一天，我忽然想起，似乎多旧不很看见他了，但记得曾见他在后园拾枯竹。我恍然大悟似的，便跑向少有人去的一间堆积杂物的小屋去，推开门，果然就在尘封的什物堆中发见了他。

他向着大方凳，坐在小凳上；便很惊惶地站了起来，失了色瑟缩着。大方凳旁靠着一个蝴蝶风筝的竹骨，还没有糊上纸，凳上是一对做眼睛用的小风轮，正用红纸条装饰着，将要完工了。

我在破获秘密的满足中，又很愤怒他的瞒了我的眼睛，这样苦心孤诣地来偷做没出息孩子的玩艺。我即刻伸手折断了蝴蝶的一支翅骨，又将风轮掷

在地下，踏扁了。论长幼，论力气，他是都敌不过我的，我当然得到完全的胜利，于是傲然走出，留他绝望地站在小屋里。后来他怎样，我不知道，也没有留心。

然而我的惩罚终于轮到了，在我们离别得很久之后，我已经是中年。我不幸偶而看了一本外国的讲论儿童的书，才知道游戏是儿童最正当的行为，玩具是儿童的天使。

于是二十年来毫不忆及的幼小时候对于精神的虐杀的这一幕，忽地在眼前展开，而我的心也仿佛同时变了铅块，很重很重的堕下去了。但心又不竟堕下去而至于断绝，他只是很重很重地堕着，堕着。

我也知道补过的方法的：送他风筝，赞成他放，劝他放，我和他一同放。我们嚷着，跑着，笑着。——然而他其时已经和我一样，早已有了胡子了。

我也知道还有一个补过的方法的：去讨他的宽恕，等他说，“我可是毫不怪你呵。”那么，我的心一定就轻松了，这确是一个可行的方法。

有一回，我们会面的时候，是脸上都已添刻了许多“生”的辛苦的条纹，而我的心很沉重。我们渐渐谈起几时的旧事来，我便叙述到这一节，自说少年时代的胡涂。“我可是毫不怪你呵。”我想，他要说了，我即刻便受了宽恕，我的心从此也宽松了罢。

“有过这样的事么？”他惊异地笑着说，就像旁听着别人的故事一样。他什么也不记得了。全然忘却，毫无怨恨，又有什么宽恕之可言呢？无怨的怨，说谎罢了。我还能希求什么呢？我的心只得沉重着。

现在，故乡的春天又在这异地的空中了，既给我久经逝去的儿时的回忆，而一并也带着无可把握的悲哀。

我倒不如躲到肃杀的严冬中去罢，——但是，四面又明明是严冬，正给我非常的寒威和冷气。

一九二五年一月二十四日



魯迅 (Lǔ Xùn ルーシュン ろじん 1881～1936)

中華民国の文学者・思想家。浙江省紹興出身。姓は周、名は樹人。

家は富裕な読書人階級であったが、彼が幼少のころに没落した。1902年に医学を学ぶために日本に留学し仙台医学専門学校で学んだが社会改革の力が文学にあるとして文学の翻訳、研究に転じた。

帰国後、魯迅のペンネームで「狂人日記」や「阿Q正伝」など多くの小説・散文を発表した。1930年に中国左翼作家連盟が成立すると、その実質的な指導者となった。

自伝的短編小説「藤野先生」は留学時代の恩師、藤野巖九郎教授のまじめな人となりを紹介し、魯迅がなぜ文学の道を志したかを示す優れた作品で、現在でも日本や中国で広く読まれている。